

「摂理」教祖のメシヤ性への指摘

はじめのことば

「摂理」のメンバーの多くは、「先生が再臨のキリストであり、彼の言葉は絶対である。」という観が先立ってしまい、「摂理」と「先生」にとって不利な情報に対して、真摯に向き合うことができず、無視と排斥をしてしまいます。しかしこれは、客観的で合理的な判断からは程遠く、論理の順序としても転倒したものです。本来ならば、客観的情報によって、彼が再臨のキリストか否かを判断すべきであって、彼がキリストであるということを前提に、情報や状況を判断すべきではないはずです。これは、自らの無知に目を伏せる行為であり、自らの人生の豊かな選択を阻害するものでもあります。

本来ならば、多角的で客観的な姿勢のもとに、情報に対して、鵜呑みにするのでも無視するのでもなく、真摯に見つめた上での判断が必要なはずで

それが達成されることを目的として、「先生が再臨のキリストであり、彼の言葉は絶対である」という観に対して指摘をしようと思います。

具体的には、「摂理」の教義「バイブルスタディー：30講論」の中で、「先生」と呼ばれる教祖、鄭明析氏が再臨のキリストであるという主張の内容に対して、キリスト教との教義比較ではなく、「摂理」がその教義の長所要素としてあげている、論理的合理性にもとづいて検討してみます。

「摂理」が卑下して扱うことによって自己の正当性を主張するのに用いているキリスト教との聖書解釈の比較を用いずとも、「摂理」自身の解釈や主張に目を向けることで、その合理性についての指摘は可能だと思います。

「摂理」が主張していることと、その主張の根拠としている「聖書」の中身とを吟味することにしましょう。

後半では、「先生」をキリストとして見ること、見ないことについて、その意味を考えを進めてみることにします。

「摂理」に居る間は、「先生」がキリストであるという認識は当然のこととして見つめる機会がほとんどないためです。自分たちが思っていること、行なっていることにどんな意味があるのかを考えることは、どう判断し選択するかをサポートすると思います。

- 目次 -

BS「ひと時とふた時と半時」の講義について P. 2
BS「特別比喩」の講義、「鷺」について比喩解釈について P. 9
教祖「先生」のキリスト性への指摘のまとめ P. 12
補足、「淫行による墮落論」と「雲」の比喩解釈の経緯について P. 13
補足、BS「カインの性格」の講義について P. 14
「先生」をキリストとして受け入れていく仕組み P. 21
「先生」がキリストではないことの意味 P. 23
「摂理」にしかないものはあるのか P. 27

BS「ひと時とふた時と半時」の講義について

教祖鄭明析氏が、再臨のキリストであるという「摂理」の主張のひとつは、
バイブルスタディーの「ひと時とふた時と半時」の講義で伝えられる[ダニエル書12章]の解き明かしにあります。
それは次の内容です。以下は私の講義ノートより大筋を転写したものです。

紀元前600年ごろ、イスラエルはバビロニアによって捕囚されていた。その中で、イスラエルの神を強く信仰していたダニエルは、このみじめな状況に思い悩んでいた。

[ダニエル12:6] 「この異常な出来事はいつになって終わるのでしょうか」とダニエルは神に祈り尋ねた。

[ダニエル12:7] その答えは「ひと時とふた時と半時である。」とあった。

[ダニエル12:8] 聡明なダニエルにもこのことは理解できなかった。さらに執拗に求めたが

[ダニエル12:9] 「あなたの道を行きなさい。この言葉は終わりの時まで秘し、かつ封じておかれます。」との答えであった。ダニエルの時代には関係がないのだと言われた。

[ダニエル12:10 - 13] この場面に出てくる「1290日」「1330日」という数字、これについてダニエルは解くことができなかったのである。

「先生」はこの成句に目が留まり、このことについて祈りを求めた。

1973年2月3日の早朝、天から「ウォンをドルに換算しなさい。」と靈感が与えられた。

「ひと時とふた時と半時」。その「時」を「年」に置き換えればよいと悟った。

[黙示録12:14] 「一年、二年、半年の間」と書いてある。(一年)+(二年)+(半年)=3年半である。

これはイエス・キリストが宣教された3年半や墓の期間の3日半とも重なる象徴的な数字である。

3年半が何日にあたるか計算をしてみるが、現在のグレゴリオ期では1年間で365日と366日(閏年)があり、日数が定まらない。聖書の中での1年(天の1年)間の日数を求める必要がある。

ノアの時代の洪水の日数を見てみると、

[創世記 7:11] 洪水の最初の日 2月17日

[創世記 7:24] 150日の後

[創世記 8: 4] 水がひく日 7月17日

5ヶ月が150日であるから、つまり天の1ヶ月は30日であることがわかる。

そして3年半は、 $30日 \times 12ヶ月 \times 3.5年 = 1260日$ である。

この1260日という数字はいくつかの聖書箇所に出てくる。

[黙示録 12:6] 1260日

[黙示録 13:5] 42ヶ月

[黙示録 11:1 - 9] 1260日、42ヶ月、3日半

1260日、42ヶ月、3日半には次のような意味を持つ象徴的数字である。

神の使命者の使命期間。

蕩滅期間として負った罪を相殺する期間 [民数記 14:34]

条件を立てる期間 [エゼキエル 4:6] [ヤコブ 5 - 17]

[ダニエル書12章]に話を戻すと、日を年に置き換えるならば、1260年という数字が導き出される。そうであるならば、当然ダニエルが活着しているうちのことではなく、神がダニエルには関係のないことだと告げたのも理解できる。

では、どこから数えて、1260年であろうか？

[ダニエル12:11]「常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から」とある。これはいつのことだろうか？

常供の燔祭とは、聖地エルサレムの聖殿での毎日の捧げもののことである。つまり聖殿が取り除かれることを意味する。

現在、エルサレムには聖殿はなく、嘆きの壁があり、イスラム教のモスクが建てられている。

では、荒す憎むべきものとは、イスラム教のことであるのか？イスラム教について考えてみる。

[創世記16章] アブラハムと妻サラの間には当初、子ができなかった。そのため、アブラハムはつがえめのハガルとの間に子イシマエルをもつ。イシマエルはイスラム教の先祖となる者である。しかし後にアブラハムは神に祝福され、サラの子イサクを産む。イサクはユダヤ教の祖先となる者である。

神は正妻の子イサクを通して歴史をなされた(「カインの性格」の講義で学ぶ善悪分立論が根拠となる。)。しかし、僕の子イシマエルも祝福を受けることになる。このことによってイスラム教は現在2番目に大きな宗教になっている。

神はユダヤ教を完全な天の歴史としようとなされたが、イエス・キリストをユダヤ民族が裏切ったために、歴史が大きく変わり、キリスト教が枝分かれするようになる。

神がユダヤ教に働くことができなくなって、エルサレムはローマ軍に取り囲まれて聖殿も壊されてしまった。

このため、神はカイン側のイスラム教を立てなければならなくなった。

「荒らすべき憎むべきものが立てられる時」とは、

イスラム教のモスクがエルサレムに建てられ始めた、西暦(紀元後)688年のことである(この建設年はユダヤ大辞典に記されている。)

この西暦688年を基準に歴史を考えてみる。

[ダニエル書12章]には、「ひと時とふた時と半時(1260年)のほかに「1290日(年)」と「1335日(年)」とが、この基準をもとに示されている。

西暦688年 + 1260年 = 1948年

この年の5月14日に国連保護のもと、イスラエル建国を迎える。

ダニエルの時代にイスラエル民が自国を失ってから、蕩滅期間を経て、ダニエルに伝えられた「ひと時とふた時と半時」の御言葉が確かに成就されている。

688年を基準の時とすることは正しいと考えられる。

このイスラエル建国を「肉的(第1)イスラエル解放」という。

西暦688年 + 1290年 = 1978年

この年には「霊的(第2)イスラエル解放」が起きた。キリスト教が解放されたのである。イエス・キリストが奪われてから、キリスト教は真理ではなく、ただキリストへの愛で続いてきた。この真理のない状態から人知れぬうちに御言葉が宣布され、キリスト教が復活していく時を迎えたのである。(つまり再臨のキリストが成約時代の御言葉を布教することを示す。)

西暦688年 + 1335年 = 2023年

まだ迎えていない時であるが、神がダニエルを通して予言した歴史のひと段落が区切られるだろう。(再臨のキリストの使命が終わることを示す。)

「先生」はこのことを悟ることで神から使命を受け、1978年6月1日にソウルへ上り、伝道をし、御言葉を伝え始めたとされる。

補足:

1978年から2023年までの期間を、完全数7によって区切る。

1978年からの(7×3=)21年間を「摂理の前半期」とし、1999年(ノストラダムスの大予言の年)を迎える。

1999年から2002年の3年6ヶ月を「墓の期間」とし、再臨のキリストが墓に眠る人々(西欧キリスト教諸国のもと)へ布教を行なう。

2002年6月の日韓共催ワールドカップを持って、2023年までの21年間を「摂理の後半期」とする。

この中で、年数計算の基準となっている「常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時」に着目してみます。

現在のエルサレムの状況からイスラム教について思いを馳せる前に、まずは聖書に目を向けてみましょう。

そもそも、この講義で取り扱っている旧約聖書にあるダニエル書とはどういうものか見てみます。

ダニエル書は大きく分けて、1～6章のダニエルの半生におきた出来事が時系列で表記された前半部分と、7～12章のダニエルが見た幻の内容のいくつかについて記されている後半部分から成っています。

前半部分に記されているダニエルの半生を簡単に追ってみます。

1章: ユダの王エホヤキムの時代に、バビロンの王ネブガデネザルがエルサレムに侵攻、神の意思によってバビロンに制圧される。ネブガデネザル王は、王宮に仕える者を連れてこさせ、自国の言語や文化を学ばせ、王に仕えさせた。その中にダニエルもいた。ダニエルは知性に長けた者だった。

2章: ダニエルが、ネブガデネザル王の夢を、神の啓示により言い当てた上で解き明かす。その夢は未来の国々の盛隆廃退を予言するものであった。その解き明かしにより、ダニエルはより高い地位へと就く。

3章: ネブガデネザル王は全国民に偶像崇拜を強要させる。ダニエルの3人の仲間は、イスラエルの神を信仰するために、それに反抗する。そのために火の炉へ投げ込まれる罰を受けるが、神の加護により生還する。彼らの信仰は王により認められる。

4章：ネブガデネザル王が再び夢を見、ダニエルが解き明かしを行なう。それは、王の以後の生涯についての啓示であり、そのとおりに成就し、王は国を追われるが、その中で信仰を取り戻し人生を終えていく。

5章：ネブガデネザルの子ベルシャザル王による神への不信仰の中で、神の手によって壁に不可解な文章が書き記される。ダニエルが解き明かしを行い、ベルシャザル王の治世の終わりを告げる。

6章：ダリヨス王による統治の中、ダニエルは総督の上官となった。多くの総督らのねたみを買ったダニエルは、その信仰心を利用した陰謀にはめられ、獅子の待つ穴へ落とされる。その信仰により生還したダニエルを見た王は、大いに喜び、全国民にダニエルの信仰する神を拝するよう命ずる。ダニエルはダリヨス王とクロス王の世に栄えた。

後半部分は

7章：ベルシャザル王による治世の元年にダニエルが見た夢について。

8章：ベルシャザル王による治世の第三年にダニエルが見た幻について。

9章：ダリヨス王による治世の元年に、ダニエルはエレミヤによる書の言葉を解き明かし、天使ガブリエルによって与えられた御言葉と幻とについて。

10～12章：クロス王による治世の第三年にダニエルに与えられた幻の中の啓示について。

[ダニエル 8:19 - 26]に解き明かしがあるように、どの幻においても、ダニエルの時代以降の国々の隆盛と廃退について示され、終わりの時への流れが記されていることがわかります。

そして、そのダニエルが見た幻の中で[ダニエル 12:11]に「荒す憎むべきものが立てられる時」と記されています。

「荒す憎むべきものが立てられる時」については他にも書き記されている箇所があります。

ひとつは新約聖書にあり、[マタイ 24:15]で、ここでは、イエス・キリストが弟子たちに世の終りの時について、預言者ダニエルの箇所を引用して話している場面です。

[ダニエル書7～12章]の中にも「荒す憎むべきものが立てられる時」を示唆する箇所があります。

[ダニエル 8:11 - 14]

[ダニエル 9:2]

[ダニエル 9:24 - 27]

といった箇所です。これらには「二千三百」日や「七十年」「七十週」「七週と六十二週」などの数字もありますが、表現に難しいところもあり、理解するのは容易ではないかもしれません。

しかし、

[ダニエル 11:31]には「彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し、常供の燔祭が取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう」という表記があり、誰が荒す憎むべきものを立てるのが記されています。

また、そのひとつ前の節[ダニエル 11:30]には「彼は帰って行って、聖なる契約を捨てる者を顧み用いるでしょう。」と荒す憎むべきものを立てた者を起用する存在も記されています。

[ダニエル書11章]とは、神からの啓示がダリヨス王に臨み、彼の国ベルシャ以降どのように国々が盛隆廃退し、常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられて、終りの時に至るのが解き明かされている箇所です。

[ダニエル書11章]を、その登場人物に注目して、追っていくことにしましょう。

5:31 メデアびとダリヨスとその國を受けた。この時ダリヨスは、おおよそ六十二歳であった。
 6:28 こうして、このダニエルは、ダリヨスの世と、ベルシャ人クロスの世において栄えた。

- ① ベルシャの王ダリヨス
- ② 第二の王
- ③ 第三の王
- ④ 第四の王
- 5 またひとりの勇ましい王
- 6 北の王
- 南の王
- 南の王の娘
- 南の王の娘の血縁者
- 7 北の王の子
- 8 これに攻めてくる者
- 9 代って起る者
(数日のうちに滅ぼされる)
- 10 代って起る者
(卑しむべき者)
- 11 聖なる契約を捨てる者

11:1 わたしはまたメデアびとダリヨスの元年に立って、**彼を強め、**カづけたことがあります。
 2 わたしは今あなたに真理を示そう。見よ、ベルシャになお**三人の王**が起るでしょう。その**第四の者**は、他の全ての者にまさって富み、その富によって強くなったとき、**彼はすべてのものを動員して、ギリシヤの國を攻めます。**

3 **またひとりの勇ましい王**が起り、大いなる権力をもって世を治め、その意のままに事をなすでしょう。
 4 **彼が強くなった時、**その國は破られ、天の四方に分かたれます。それは**彼の子孫に傳せず、**また**彼が治めたほどの権力もなく、**彼の國は抜き取られて、**これら以外の者どもに備する**でしょう。

5 **南の王は強くなります。**しかしその將軍のひとりが、**彼にまさって強くなり、**権力をふるいます。その権力は、大いなる権力です。
 6 年を経て後、**彼らは縁組をなし、南の王の娘が北の王はきて、**和親をはかります。しかし**その女は、**その腕を保つことができず、**その王も、その子も立つことができません。その女と、**その従者と、その子およびその女を獲た者とは、**わたされる**でしょう。

7 そのころ**この女の根から、**一つの芽が起って**彼に代り北の王の軍勢にむかってきて、**その城に討ち入り、これを攻めて勝つでしょう。
 8 **彼はまた**彼らの神々、**精像および金銀の貴重な器物を、**エジプトに携え去り、そして数年の間、**北の王を討つことを控えます。**
 9 その後、**北の王は、**南の王の國に討ち入るが、自分の國に帰るでしょう。

10 **その子らはまた**憤激して、**あまたの大軍を集め、**進んで行って、**みなざりあふれ、**通り過ぎるが、**また行って、**その城にまで攻め寄せるとして、**その城にまで攻め寄せるとして、**
 11 **そこで南の王は、**大いに怒り、出てき**北の王と**戦います。彼は**大軍を起すけれども、**その軍は相手の手にわたされるでしょう。
 12 **彼がその軍を打ち破ったとき、**その心は高ぶり、**数万人をうち倒します。**しかし、**勝つことはありません。**
 13 **それは、北の王が**また初めより大いなる軍を起し、**数年の後、**大いなる軍勢と多くの軍需品とをもって、**攻めてくる**からです。

14 **そのころ**多くの者が起って、**南の王に**敵します。また**あなたの民のうち、**みづから高ぶって事をなし、**幻を成就しようとするが**失敗するでしょう。
 15 **こうして北の王がきて、**壘を築き、**堅固な町を取るが、**南の王は**これに立ち向かうことができず、**またそのえり抜きの民も、**これに立ち向かう力がありません。**

16 **これに攻めてくる者は、**その心のままに事をなし、その前に立ち向かうことのできる者はなく、**彼は**麗しい地に立ち、その地は**全く彼のために荒ら**されます。
 17 **彼は**全国の力をもって討ち入ろうと、**その顔を向けるが、**相手と仲直りをし、**その娘を**与えて、その國を取ろうとします。しかし、その事はならず、**また彼の利益には**ならないでしょう。
 18 **その後、**彼は顔を海沿いの國々に向けて、**その多くのものを**取ります。しかし、**ひとりの大將があつて、**彼が与えた**恥辱を**そそぎ、**その恥辱を**彼の上に返します。
 19 **こうして**彼は、その顔を自分の國の要害にむけるが、**彼は**つまずき倒れて消えうせるでしょう。

20 **彼に代って起る者は、**栄光の國に人をつかわして、**租税を取り立て**させるでしょう。しかし**彼は、**怒りにも戦いにもよらず、**数日のうちに滅ぼ**されます。

21 **彼に代って起る者は、**卑しむべき者であつて、**彼には、**王の尊嚴が与えられず、**彼は**不意にきて、**巧言をもって**國を獲るでしょう。
 22 **洪水のような軍勢は、**彼の前に押し流されて敗られ、**契約の君たる者も**また敗られるでしょう。
 23 **彼は、**これと同盟を結んで後、**偽りのおこないを**なし、**わずかな民**をもって強くなり、
 24 **不意に**その州の最も肥えた所に攻め入り、**その父も、その父の父も**しなかつたことをおこない、**その奪つた物、**かすめた物および財宝を、**人々の中**の中に散らすでしょう。**彼は**また計略をめぐらして、**堅固な城**を攻めるが、それは時の至るまでです。
 25 **彼は**その勢力と勇氣とを奮い起し、**大軍を率いて**南の王を攻めます。南の王もまたみづから奮い、**はなはだ**大いなる強力な軍勢をもって戦います。しかし、**彼に対して、**陰謀をめぐらす者があるので、**これに立ち向かうことができません。**
 26 **すなわち**彼の食物を食べる者たちが、**彼を**滅ぼします。そして、その軍勢は押し流されて、**多くの者が**倒れ死ぬでしょう。
 27 **このふたりの王は、**害を与えようと心にはかり、**ひとつの食卓に**共に食して、**偽りを**語るが、それは成功しません。終わりはなお定まった時の来るまでおこないからです。
 28 **彼は**大いなる財宝をもって、**自分の國に**帰るでしょう。しかし、**彼の心は**聖なる契約にそむき、**ほしいままに**事をなして、**自分の國に**帰ります。
 29 **定まった時**になって、**彼は**また南に討ち入ります。しかし、**この時は**前の時のようではありません。
 30 **それは**キレテムの船が、**彼に**立ち向かって来るので、**彼は**脅かされて帰り、**聖なる契約**に対して憤り、**事を行**うでしょう。**彼は**帰って行って、**聖なる契約を捨てる者**を顧み用いるでしょう。

31 **彼から**軍勢が起って、**神殿と城郭**を汚し、**常供のはん祭**を取り除き、**荒らす憎むべきもの**を立てるでしょう。

ダリヨス王とは、[ダニエル書6章] に記されているように、ダニエルが仕えた紀元前6世紀ごろのペルシャ帝国の王です。(Wikipediaによると、ダリヨス(ダレイオス)1世の統治は紀元前521年~486年とされる。)

ダリヨス王から、荒す憎むべきものを立てた聖なる契約を捨てる者に至るまで、計11人のつながりがあることがわかります。

この数値をもとに、「摂理」が主張する「荒す憎むべきものが立てられた」年、西暦688年を考えると、その差は紀元前521年(治世第一年の啓示) + 紀元後688年 = 1209年間となります。

この期間を計11人(うち1人は数日で滅びたと記されているので実質10人)でつなぐとなると、ひとりが受け持つのは、ゆるく見積もっても平均100年間以上になります。これは、人間の寿命を考慮すると、明らかに不可能なバトンリレーです。

どうやら「荒す憎むべきものが立てられた」と表現されている時は、西暦688年を指し示しているのではないようです。ダリヨス王から始まる[ダニエル書11章]に記されたこの一連の経緯が、紀元1世紀初頭のイエス・キリストの生涯期間を大きく飛び越えていくことは難しいことです。仮に十人ほどで西暦688年につなごうとするならば、ダリヨス王は、イエス・キリストより後に存在したことが妥当であり、歴史の逆転が起ってしまいます。

そもそも「摂理」の主張では、現状のエルサレムにイスラム教モスクが建てられていることに着目していますが、その建設以前の歴史の中でエルサレムの聖殿が廃されたことについての検証を怠っています。

また、イスラム教というのは預言者ムハンマドを通して、絶対唯一神アッラーを信仰する宗教です。その徹底された幾何学装飾アラベスクも物語るように、完全に偶像崇拜を禁止した、非常に厳格な信仰です。「荒す憎むべきもの」として、イスラム教を見るのであれば、その他多くある偶像崇拜をする宗教や絶対唯一神を否定する存在に対しての可能性も十分に検討するべきだと思います。

そして、[ダニエル 11:31]では「汚された神殿と城郭」と「取り除かれた常供の燔祭」とを表現として分けています。[ダニエル 8:11-14]でも「取り除かれた常供の燔祭」と「倒された聖所」とを区別しています。「神殿 temple」と「聖所 sanctuary」と「常供の燔祭 daily sacrifice」とを混同しているのは、「摂理」の理解不足だと指摘できます。「神殿」は建物であり、「聖所」は場所、「常供の燔祭」は物または行為だと理解を分けるべきです。

なにより、「摂理」自身が、「エルサレムとその聖殿はローマ軍によって取り壊された。」と「ひと時とふた時と半時」の講義の中で主張しているのですから、[ダニエル 11:31]を認識しているのであれば、「荒す憎むべきものが立てられたのはローマ軍によるエルサレム侵攻の時だ」との理解に至るべきで、自己矛盾は明らかです。

ちなみに、キリスト教の書籍『聖書辞典』を見ると、[ダニエル11:31]の「荒す憎むべきもの」は、「紀元前168年にシリアの王安ティオコス4世エピファネス(Wikipediaに彼に関する情報あり)がエルサレムに侵攻し、聖殿に立てた異教の神ゼウスの祭壇」を示すものだと考えられるという内容の文章がありました。また、ダニエル書を引用した[マタイ 24:15]の箇所は、ローマ軍の侵攻によって神殿に建てられたローマの国旗か皇帝の像を指し示しているとも考えられる、といった内容の表記がありました。「荒す憎むべきもの」について歴史にもとづいたキリスト教のひとつの理解があるようです。「先生」がキリスト教に真に精通しているのなら、これらのことに既に言及があったはずでしょう。

本来、「終わりの時」について教えを説くのであれば、このダニエル書に記されている多くの幻の内容について合理性のある解き明かしすることが必要だと思われます。「摂理」の教えでは、都合のいいように聖書の箇所と数字を用いていますが、それでは他の箇所との矛盾が起きてしまいます。

つまり結論として、年数計算の基準である西暦688年が間違っていますので、そこから導き出される、「1978年の再臨のキリストによる成約時代の始まり」も「2023年の再臨のキリストの使命期間の終わり」も誤ったものであると言えます。これが、「ひと時とふた時と半時」の講義における、教祖鄭明析氏の再臨のキリスト性の主張が非合理的であることの指摘です。

BS「特別比喩」の講義、「鷲」の比喩解釈について

「ひと時とふた時と半時」の教義は、教祖鄭明析氏が再臨のキリストであるという時系的な主張ですが、場所に関する主張が、[イザヤ 46:11]の解き明かしです。

この箇所は初級の講義「比喩について」の中の「特別比喩」の「鷲」の項目で伝えられます。

[イザヤ 46:11]「わたしは東から猛禽を招き、遠い国からわが計りごとを行なう人を招く。わたしはこの事を語ったゆえ、必ずこさせる。わたしはこの事をはかったゆえ必ず行う。」

この「私は東から猛禽を招き、…」という神の啓示の箇所を用いて、「東」とは極東アジアの熱心なキリスト教国である韓国を指し示している。

「猛禽」とは「鷲」のことで、「鳥類の王」である鷲は「メシヤ・キリスト」を喩えていると教えます。

つまりこの聖句は、韓国から再臨主が現れることを予言していると解釈するのです。

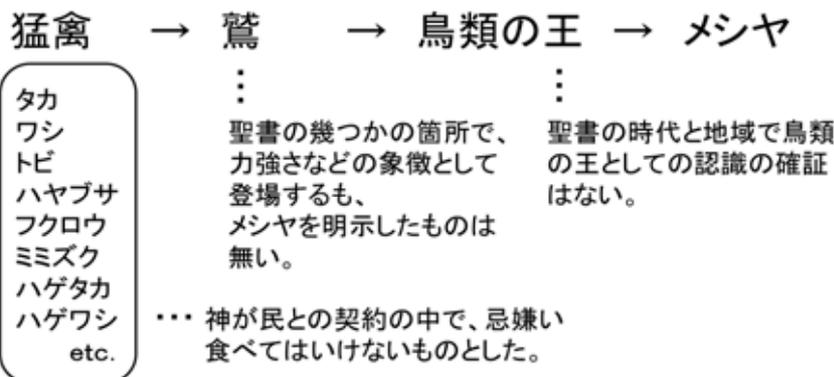
しかし、この解釈には文意の問題ではなく、論理的な無理が指摘されます。

まず、旧約聖書が書かれていたとされる時代とその地域において、「鷲」が鳥類の王であるという認識があったのかの検証を「摂理」は怠っています。現代の私たちの認識からの憶測でしかありません。考古学的な見地からの信頼できる情報がなければ、このことは言えません。

また、「鷲」は聖書のいくつかの箇所に登場していますが、次ページの「鷲・わしの登場する聖句箇所」の表のとおり、「鷲はメシヤ・キリストを喩える。」と明示されている箇所はありません。例えば「ぶどう」はイエス・キリスト自身が[ヨハネ福音書 15:5]で「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」と語り、明示してあります。鷲が登場する多くの箇所は直喩として用いられています。直喩である以上は、「鷲のように」であって、「鷲のようなキリストのように」とはならないことは明らかです。また残りの多くは黙示文の中で登場します。黙示である以上は、その文章全体の意味を全て説明する必要がありますが、「摂理」のバイブルスタディーでは達成されていません。つまり聖書に基づいて「鷲 = メシヤ」とは言えていません。

なにより、たとえば「カエルは両生類」であるが「両生類はカエル」ではないように、「リンゴは果物」であるが「果物はリンゴ」ではないように、「鷲は猛禽」であると言えますが、「猛禽は鷲」ではないのです。これは「集合」と「要素」の問題です。猛禽類にはタカやハヤブサやトビやフクロウなど鷲以外にも多くの種類があり、この聖句からは「猛禽」を「鷲」とは特定できません。

ちなみに、「猛禽」類の鳥は旧約聖書では、神が人に対して「食べてはいけない」とその契約の中で伝えた、汚れた悪しき生き物として記されていて、基本的にはマイナスのイメージだといえます。そのことは[レビ記 11:13-19][申命記 14:12-20]に記されていて、他[ヨブ記 28:7][イザヤ 18:6][エレミヤ 12:9][エゼキエル 39:4]にも登場します。



このイザヤ書の箇所「摂理」独自の解釈は、数段階の飛躍があり、明らかに論理的な無理のある解釈だと言えます。[イザヤ 46:11]の箇所は、神が「猛禽」が象徴する何かを東から呼び寄せを示しているのだから、それがメシヤ・キリストだとは言えないことが理解できます。ちなみに、キリスト教ではこの「猛禽」は、バビロンで捕囚されていたユダヤ民族を解放したペルシャのクロス王を指していると考えられることが多いようです。

数段階の論理飛躍がありながらも、バイブルスタディーを学ぶ人がこの「摂理」の解釈を簡単に受け入れるのは、動物・植物・その他・特別といった一連の比喩の講義の中で、犬といえばあれ、豚といえばこれ、ブドウといえばそれ、といった具合に連想作業を数十回も繰り返すうちに、提示されたイメージを受け入れやすくなっているからかもしれません。

比喩には解釈する側の意図によって自由に意味を引き出すことのできる融通性があり、ときにそれは危険をもたらします。聖書を神の言葉として捉えるのであれば、人間側の意図が入り込まないように最善の注意が必要なのではないでしょうか。

「摂理」での比喩論におけるそれぞれの言葉の解釈が、自分たちに都合のよい形で引き出されていることが多いことは、引用箇所の前後関係を見ることと聖書の他の箇所でどのようにその言葉が登場しているかを見ることによってと明らかになります。「摂理」がいう「聖書は比喩で書かれている」ということは、「聖書は比喩で書かれているところもある」という当然の事実とは異なります。「摂理」は「聖書は比喩で書かれている」と教えることで、信者やバイブルスタディーを学ぶ人に、その箇所が比喩で(どのような表現手法をもって)書かれているか判断するという、聖書を読むにあたって基本的で大切な行為から目をそらさせているのです。そうしなければ「摂理」の教義は成立せず、受け入れられないからです。

実は、統一協会の教祖である文鮮明氏は、自らが再臨のメシヤだと名乗り、その証拠として新約聖書の[黙示録 7:2]「また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。」の箇所をあげています。

この聖句の「日の出る方」とは極東アジアを示し、その地域のキリスト教国である韓国から、「生ける神の印を持って」救世主が現れると解釈するそうです。が、この聖句に記されているのは「もうひとりの御使」であって救世主のことではありません。

「摂理」と同じように、救世主が極東アジアから現れることを主張しようとしています。その主張は合理性に欠けるものと言えます。

教祖「先生」のキリスト性への指摘のまとめ

「摂理」での教義「バイブルスタディー」や伝えられる説教が正しいとされるのは、「それを伝えている教祖である鄭明析氏が再臨のキリストである」からです。そして、彼が再臨のキリストである確証は、バイブルスタディーで伝えられるこれらの聖書の解釈が正しいとされるからです。

しかし上記に示したように、彼が再臨のキリストであるという聖書解釈の主張は、時間の点においても場所の点においても、合理性に欠いたものです。ちなみに歴史的検証に基づいたキリスト教の解釈のひとつを見れば、「摂理」が用いたそれらの聖句は旧約時代のうちに成就していることにもなります。

彼はそういった論理の飛躍や検証の不備を見すごしたまま、自らが再臨のキリストであることを主張することとなりました。本来ならば、主張するにあたり十分に検証し調査すべきことであり、そこから合理性が得られたのであれば、すでにバイブルスタディーの中で論じられ教えられてきたはずで、「摂理」は教義を伝える際に、その合理性の高さを強くアピールしているのですから。

しかし、そのことに触られていないということは、彼が自らの主張に妄信的になってしまったか、もしくは意図的にそういった検証を行わなかったかということではないかと思います。

また、メンバーもそういった合理性のなさや検証の不備に気付くことなく、「摂理」から教えられたことだけをただ受け入れ、自ら多角的な視点で調査することなく、教祖鄭明析氏が再臨のキリストなのだとして理解し認めています。

それは、メンバー自身が社会の様々なこと、特に宗教について世間知らずであることや、「摂理」の組織的な管理体制の中で外部情報の入手や検証の機会や意識を阻害されてしまうことなどが主要な原因だと思います。また、多くの者(特に宗教的体験の中にいる者)が潜在意識の中で「真理」「救い」「理想世界」「救世主」といった事柄に魅力を感じ、眼前にそれがあるかもしれないという状況の中において、それを肯定しようと望む思惑や深層心理が強く働くことも考えられます。

バイブルスタディーを学ぶ時に、社会に関するある程度の知識をもち、外部情報の入手や検証への意識と手段があり、自分の心理状態に対する冷静な認識ができていれば、「摂理」の「先生」が再臨のキリストであるという主張は不十分だという思考へと進むだろうと感じます。

しかし、「再臨のキリストが現世に居るかもしれない。」「先生と呼ばれる人がそのキリストかもしれない。」とバイブルスタディーを学ぶ者の頭によぎる思いを、温室育成する環境が増幅させ、「キリストが言うことだからその内容は正しい。」「その内容は正しいから、彼がキリストである。」という自己循環した思考へと導いていくのだと思います。

本来であれば、ありとあらゆる多様な視点からの検証をも打ち破る合理性を持っているべきである「再臨のキリスト」にまつわる教義の主張が、伝える側も受ける側もその検証を回避し、つまるところ「彼がキリストであるから、彼はキリストである。」という盲目的な認識に支えられているのが、「摂理」の現状なのだと感じます。

そのような本末転倒な思考から抜け出して、論理的に「摂理」の教義・バイブルスタディーを精査することがメンバーにとって重要だと思います。

補足、「淫行による墮落論」と「雲」の比喻解釈の経緯について

教義についてではないですが、補足的に指摘をすると、
バイブルスタディーの「墮落について」において、「摂理」では、
「人間の原罪のもととなる墮落の原因は、サタンにそそのかされたエバが未成熟なうちにアダムと性関係を持ったという、淫行の乱れである。」
と主張していて、「このことは人間の墮落からの回復に関わる核心部分であり、天の最大の奥義であり、キリストにしか解き明かせないことだ。」と伝えます。

しかしながら、このような「淫行による墮落論」を教えているのは、「摂理」に限ったことではありません。
鄭明析氏が講師として所属していたとされる統一協会においても同様に、「アダムとエバの淫行による墮落論」を「摂理」興る以前から伝えています。

また、韓国には統一協会が興る以前から、神秘神霊主義として多くの教団が存在し「混淫派」と呼ばれ、「韓国から現れる再臨主の存在」と「淫行による墮落論」を教義として伝えてきた歴史的経緯があるそうです(参照Webページ:宗教問題研究会内の「神秘神霊教団」の項)。統一協会もまたその流れを受け継いでいます。

ではそういった歴史的経緯がある中で、「摂理」はどの点において「キリストにしか解き明かせない」こととしているのでしょうか。

「蛇と表現されるのはサタンが主管した男性で、エバは彼にそそのかされ性関係をもった。」ことや「あばら骨は精子を意味し、善悪を知る木とは女性の生殖器を意味する。」といった補足的な解き明かしをしたという狭義においてでしょうか。やはり核心であるアダムとエバの性関係について解き明かしたという主張に対してでしょう。

「摂理」以前に、淫行による墮落論を主張している人たちがいるということは、「摂理」の主張をもとに考えると、「キリストにしか解き明かせない」ということは間違いであるか、「摂理」以前に主張した人の中に真の再臨のキリストがいるか、「淫行による墮落論」自体が間違った解釈であるか、です。

どちらにしても、「摂理」の教祖である鄭明析氏が、その教えの中で自らを再臨のキリストとすることは矛盾します。

もうひとつ、キリストの在り様についての教義で「雲」の比喻解釈があります。これは、「比喻について」の講義の特別比喻の項の中で教えられ、[ダニエル 7:13][マタイ 24:30][黙示録 1:7]にある、キリストが雲に乗ってやってくるという「雲」は、「信徒・聖徒」を意味するというものです。つまり、「キリストは水滴の固まりである気象現象の雲に乗ってやってくるのではなく、信徒・聖徒らに囲まれて現れる。」という主張です。

「摂理」では、「比喻を正しく解けるのは、キリストだけである。」と伝え教えますが、この「雲は聖徒」であるという解釈も、「摂理」以前の神秘神霊主義教団で教えられていた教義だそうです。“特別”比喻とまで銘打っている教義の核心、キリストにまつわる比喻の解釈が既に存在していたものだとすると、「墮落論」で説明したことと同様に、彼が再臨のキリストであるという主張には矛盾が生じることとなります。

彼は、自分と同じ解釈が以前からあることを知らなかったのでしょうか。それとも、以前からある主張を拝借し、あたかも自らが発見したかのごとく、教え伝えているのでしょうか。後者だとすれば大きな問題ですが、前者だとしてもキリストの資質としては不完全だと感じます。

補足、BS「カインの性格」の講義について

最後に教祖のキリスト性とは関係ないですが、「ひと時とふた時と半時」の講義の中で、イスラム教を取り上げた根拠となる「カインの性格」の講義について、見ることにします。

この「カインの性格」の講義は、「摂理」の中で、神が人を選び導く時や歴史を導く上での考えを示したもので、伝道の際の人選基準や「摂理」の歴史認識に大きく影響を与えているものです。

次の資料は、私が「摂理」に所属していた時にまとめた講義ノート、当時のままのものです。

カインの性格

カインとアベルの供え物 [創4:1 - 16]

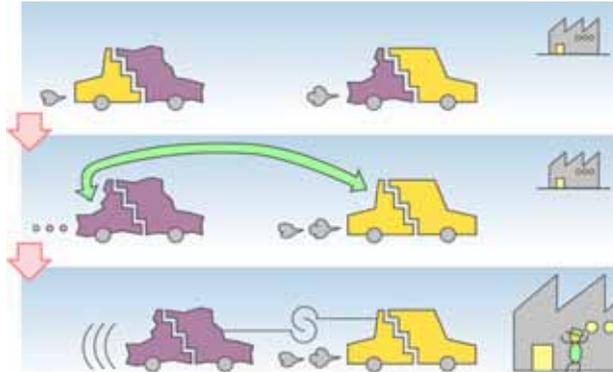
- ・なぜ神様は弟アベルの供え物は顧みられたが、兄カインのものは顧みられなかったのか？
神様はすべての人が救われることを望んでいられるのではないのか。 [テモテ 2:4] [ペテロ 3:9]

善悪分立の法則

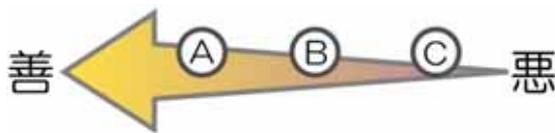
- ・歴史を導く上で、善である神様は悪には直接働きかけることはできないので、相対的により善なる方を通じて、より悪なる方をお救いになられる。 [ヨブ42:7 - 9]

・2台の故障車のたとえ

それぞれ半分ずつ壊れた2台の車(救いを求める者=カインとアベル)と、修理工場(救うもの=神様)がある。2台がそれぞれに修理工場にたどり着くのは困難である。このとき、より修理しやすい車(より善なる者=アベル)を救って、より壊れている車(より悪なる者=カイン)を修理工場へと連れてきてもらうやり方がいい。



- ・この場合の善悪は相対的なもので絶対的なものではない。
AとBではBはより悪であるが、BとCではより善と見られる。



- ・このように、神様は弟アベルを通じて、兄カインもまた救おうとされていた。

が、兄カインはこの真理を知らず神様に背いた。カインは弟アベルを殺してしまったのである。神様はノアまでの1600年間さらに人間から離れるようになった。

- ・なぜ兄カインのほうがより悪であったのか？

それは血統に関係する。カインとアベルはともに、墮落した後のアダムとエバの子供であるが、兄のカインのほうが血縁的にサタンによる主管が強かったのである。



- ・善悪分立の法則の関係性は他の多くの例にも見ることができる。カイン側の無知な対応によって歴史がうまく進まなかったこともある。

アベル側	カイン側
ノア	ノアの家族
アブラハム	アブラハムの家族
イサク	イシマエル
ヤコブ	エサウ
預言者	ユダヤ民族
イエス様	イスラエル民族

カインの性格

- ・カインは神様から顧みられなかったことに対して憤ってしまったため、神様から遠く離れた存在になってしまった。
- ・このように神様から見て悪とされる性格が54個ある。これは誰しもが多かれ少なかれ持っているもので、悟り悔い改めをしていかなければならない。 [コロサイ3:9 - 10] (行いは着るもので例えられる。)

1. 血気盛ん・憤り

・メリバの水の話 [民数20:10 - 13]

モーセはイスラエルの民に憤り、神様の言葉に反して岩を2度打ち、水を出した。このことによりモーセはカナンに入れなくなる。

[詩106:32 - 33]

モーセは柔和であったので神様に選ばれた人であった。 [民数12:3]

[詩4:4] [エペソ4:26] [ヤコブ1:19 - 20]

・神様への不義に対する怒りは例外である。

イエス様の怒り [ヨハネ2:13 - 16]

2. 高ぶり・おごり・傲慢

・神様に対する謙遜の反対の意。

[ペテロ 5:5] [コリント 4:6, 4:19, 5:2] [箴言15:25, 18:12]

3. 無知

[エペソ4:18 - 19] [コリント 2:8] [箴言15:21]

4. 強いる

[コリント 9:7] [ペテロ 3:16]

5. 嘘・偽り

[箴言6:16 - 19, 14:5, 21:28] [エゼキエル13:6] [詩59:12 - 13]

・「はかりごと」は歴史をうまく進めるための智恵であって、嘘・偽りとはべつのものである。 [サムエル上16:1 - 3]

6. 愚か

[詩14:1] [箴言10:23, 1:22]

7. ねたみ・嫉妬

[伝4:4] [使徒5:17]

8. 人殺し

[ヨハネ 3:15] [ヨハネ8:44] [マタイ5:21 - 22]

9. 形式主義・偽善

[マタイ15:1 - 9, 6:1 - 5]

10. 無視をする・軽んじる

[ルカ10:30 - 37]

・隣人とはだれか。

11. 憎しみ

[ヨハネ 3:15] [箴言10:12] [ルカ6:32]

12. 争い

[ローマ1:29] [箴言10:12]

13. 無節制

[テモテ 3:3] [ガラテヤ5:22]

14. 無情・無慈悲

[ヨブ6:14] [ローマ1:31]

15. 逆らう

[テモテ 3:3 - 4] [ローマ1:30, 9:20]

16. 呪い

[伝10:20] [レビ24:14]

17. つぶやく

カナンを前にしてつぶやいた者たち [民数14:27, 14:36 - 38]

[コリント 10:10]

18. 裁く

[コリント 4:5] [マタイ7:1 - 2]

19. 批判する

[ローマ14:1]

20. 悪く言いふらす

[民数13:30 - 32]

21. 訴える

[使徒22:30] [ルカ6:7, 24:13 - 21]

22. 恐れさせる

[エレミヤ17:17 - 18]

23. 不従順

[サムエル上15:22] [箴言1:32]

24. 詐欺

[ヨシュア7:11] [ローマ1:29]

25. 淫行・姦淫・不品行・肉の欲

[レビ18:6 - 23] [マタイ5:27 - 28]

26. 党派心

[ピリピ2:2 - 4] [ガラテヤ5:20]

27. 陰口・讒言

・讒言 = 嘘・偽りを言うこと

[ローマ1:29] [コリント 12 - 20]

28. 貪欲

・度を越した不条理な欲望

・神様に感謝してさらに求めることが大切。

[詩篇78:18] [民数11:4 - 6] [ペテロ 2:3, 2:14]

29. 口先だけで愛する・口先だけで行いの無い信仰

[ヤコブ2:22 - 26] [ヨハネ3:18]

・子供ができることは限られているが、その弟や妹を愛し助けようとしていれば、その親にとって非常に嬉しいことだ。同じように、われわれができる限りの信仰を尽くして行えば、神様も非常に嬉しい。

・信仰 = つながること

神様の言葉を実行し、神様と同じことを感じることの大切さ。ただ知識としてでは意味が無い。

30. 虚栄心

[ピリピ2:3] [ガラテヤ5:26]

・イエス様は弟子たちの足を洗ったりして、もっとも使える人だった。リーダーが人々の前で発言したり、一見偉そうに見える時間は一瞬のもので、人には見えないところでみんなのために最も働いている。

31. 利己主義

[コリント 13:5, 13:13]

[コリント 13:]は聖書の中で「愛の章」と言われている。

32. 疑い

[マタイ14:31] [マルコ11:23]

・海・波 = 世の中の人 山 = 大きな立場をもつ人

・まず自分が成長することを祈ることが大切。親は子供が成長することが一番嬉しいものだから、御言葉でわからないことがあっても疑ってはならない。

33. 怠け・安楽

[箴言1:32, 6:9 - 12]

・祈りは霊の呼吸であり、御言葉は霊の食事、悔い改めることは風呂に入ることのようなものだから日々欠かさず行わなければならない。

34. 誘惑

[ペテロ 3:17, 2:14]

35. 偶像崇拜

・モーセの十戒[出エジ20:3 - 4] [エペソ5:5]

36. 酔っ払う・酒に酔う・泥酔

- ・酒を飲むと一週間は霊が眠ってしまう。
- ・イエスは御言葉と言う酒を振舞った。 [ヨハネ2:1 - 11]
[エペソ5:18] [ローマ13:13]

37. 感謝しない

- ・感謝しなければ人は不平不満しか口にしなくなる。
- ・感謝する人にはもっと何かをしてあげたくなる。神様も同じである。
- ・神様の小さな働きにも気づくことが大切。
恋人のことを思っていれば、無名の手紙も恋人からのものかしらと気づくが、恋人のことを思っていなければその手紙をそのまま捨ててしまうだろう。神様のこともそのように思うことが大切。
[テサロニケ 5:18] [詩篇100:4]

38. 二重人格

- [詩篇12:2] [マタイ6:24]

39. 礼儀が無い

- [コリント 13:4 - 5]

40. 限度を超えた無理な誇り

- [コリント 10:13]

41. 無関心

- [マタイ25:13]

42. 自暴自棄・あきらめること・落胆

- [ルカ18:1] [ガラテヤ6:9] [ヘブル12:3] エリヤの自暴自棄[列王上18:17 - 19, 18:23 - 19:4]

43. お金を愛すること

- [マタイ6:24] [テモテ 6:10]

44. 反抗すること・背くこと

- [詩篇78:40]

45. 真理でないことを主張する

- [ヨハネ8:44]

46. しいたげる

- [詩篇107:39]

47. 騒ぎ

- [エペソ4:31]

48. 異端だと言う

- [使徒24:5] この男 = パウロ

49. 忠誠を尽くさない

- [ヨハネ2:10]

50. 責任分担を果たさない

- [マタイ7:7]

51. あざける

- [箴言19:29]

52. 裏切り

- [マタイ26:24] [ヘブル6:4 - 6]

53. 後悔すること

- [民数23:19]

54. 主が油注がれた者に逆らう

- [詩篇2:2 - 4]

以上が、「カインの性格」の講義内容です。この講義は「カインとアベルの話」「2台の故障車のたとえによる善悪分立論」「54個のカインの性格」の3つの部分に分けることができます。

まず、創世記にあるカインとアベルのエピソードが上げられていて、供え物について弟アベルのものは神に顧みられ、兄カインのものは顧みられなかったことに対して、疑問を投げかけています。

次に、その答えとして、善悪分立論が主張されています。

ここで、聖書とはまったく関係のない2台の故障車をいかに修理するかという話が引き出されます。実際の講義では、講師が新入生に対して、「どうすればいいと思う？」と質問をします。対処法はケースバイケースであるはずで回答も様々ですが、「その場で2台の車の無事な部分、壊れている部分をそれぞれあわせて、1台の無事な車と1台の壊れた車をつくり、無事な車に壊れた車を修理工場までひっぱって来てもらう」という、やや現実離れしたとも思える解答を限定的に主張します。

これが善悪分立論のたとえで、より善なるものがより悪なるものを救いに導くべきだという考えです。

この善悪分立論の聖書における根拠を[ヨブ42:7-9]にあげています。

ヨブは神から多くの艱難を受けることでその信仰を試され、信仰を守り抜いた後、多くの祝福を受けた者として理解されています。ここでは、ヨブの友人三人が神について正しい事を述べなかったことに、神は怒りを向け、ヨブを介して供え物と祈りを捧げるように指示し手います。

この内容から「摂理」では「歴史を導く上で、善である神は悪には直接働きかけることはできない。相対的に善なるものを通じてより悪なるものを救う。」と理解をしています。この神に対する理解は特殊なものだと思います。「歴史を導く上で、神は悪には直接働きかけることができない。」と言ってしまったのですから。

神の働きに関して言及すると、ヨブ記の冒頭1・2章では神は悪そのものともいえるサタンとやり取りをかわしています。また、バイブルスタディーの「無知の中の相克世界」の講義で「神は敵と思える存在を通してでも、働かれる」と「摂理」は教えます。そして、その[ヨブ42:7-9]でも、神はヨブを介してではなく、直接その友人エリパズに話しかけています。

神から遠退いた者を、神に近い者を介して関係を回復するというのは妥当な考えで、この場面で神がヨブを介して友人たちが神に帰すよう指示をしたことは理解できることですが、ただこの一箇所をもって「歴史を導く上で、善である神は悪には直接働きかけることはできない。相対的に善なるものを通じてより悪なるものを救う。」という善悪分立論を主張するのは不十分なことだと思います。「摂理」の憶測でしかありません。「摂理」はしばしば一箇所を引き合いにだして、あたかもそれが全てであるかのように教えます。聖書の中で、神は悪に直接的に働きかけていますし、イエスは悪人にも分け隔てなく救いの手を伸べています。聖書の中でも箇所ごとに背景があり、それに基づいて出来事が起っているのは明らかです。そのことを避けて語る「摂理」の教義には、どんな意図があるのでしょうか。

さて、この善悪分立論をもとに「摂理」ではカインとアベルの話を判断します。「兄カインのほうがより悪で、弟アベルのほうがより善なる存在であった。長男カインは、アダムとエバが墮落(淫行による墮落論に基づく)したことによってサタンの主管がより強いために弟アベルに比べより悪である。より悪であるカインは、より善であるアベルを介して神に捧げ物をするべきであった。カインはそのことを理解できずに、憤り、弟アベルを殺害してしまった。」ということです。

聖書にはカインの捧げ物が神に顧みられなかった理由は明示されていません。ただ、神はカインに憤りを治めるよう諭しています。カインは怒りを抑えきれずに、アベルを殺害し、その報いを受けてしまいます。

次に講義では、聖書の中に点在する54の神から見て善くないとされる行為を並べて、「カインの性格」として一まとめにパッケージングしています。

ここで、正しく理解しておくべきことは、カイン自身はこの54にもおよぶ性格を有していたのではない。ということです。彼は憤ってしまいましたから、その時は、1つ目の血気盛ん・憤りは当てはまります。また、7つ目の妬み、8つ目の人殺しも該当するでしょう。が、それ以外の彼の性格や行為に関しては、聖書には記されていません。また、カインがより悪だとした「摂理」の理由は、その長男という血縁によるもので、彼の性格や態度によるものではなかったはずです。カインは顧みられなかったから妬み憤り殺したのであって、妬み憤りと殺人があったから顧みられなかったのではありません。聖書には、カインとアベルがどのような性格の持ち主かを明確に記したところはないのです。

聖書に記されているものを拾い集めて、「神から見て善くないとされる性格」とまとめることはできても、それを「カインの性格」と呼ぶことはナンセンスです。本来ならそのようなレッテル(人を一概に判断する枠組み)を作る必要はないはずです。「摂理」は「カインの血縁」と「善くない性格・行為」を論理の上で混同しています。「悪い性格は、その人の血縁によるものだ」と主張するのでしたら別ですが、性格と血縁の因果関係を聖書に基づいて証明する必要があります。(統一協会はアベル・カインの話から血統による罪を主張しますが「摂理」は血統罪の教義はありません。)

このように、「カインの性格」で伝えられる三つの部分は、どれも「摂理」の憶測によって結び付けられたものであって、論理的に成立しているものではないことがわかります。

この善悪分立論による歴史観をもって、「ひと時とふた時と半時」の講義の中で、イスラム教を荒す憎むべきものとして、扱っています。「摂理」はしばしば血縁の善悪と性格の善悪を関係づけて聖書の解釈をおこなうのです。

また、伝道(勧誘)や管理の活動の中で、「カインの性格」は導くべき者の選別の理由として機能します。「あの新入生は、利己心が強く、血気も盛んだから、“カイン”だな。あまり引っ張らないほうが良い。逆にあの子のほうが従順で“アベル”かな。」と、“カインとアベル”のパッケージングはレッテルを貼ることを容易にします。「カインかアベルか」その表現だけで、人選を可能にしてしまうのです。それは同時に、自分たちメンバーがより善なるアベルであるという優越感を感じさせるものでもあります。本来、人は「善い人か悪い人か」ということをそれぞれの心中で複雑に判断するわけですが、他者から受けた54個の判断基準に委ねるようになるのです。

そして、「より善なる者が、より悪なる者を救いに導く」という善悪分立論は、「摂理」の勧誘形態そのものでもあります。「摂理」では、より善である信者が選び導く人しか、「摂理」に入信することができません。「摂理」からの接触を受けない一般の人(より悪なる人)が、自らの手で調べ教義を学び、「摂理」の信仰に至ることはありません。その「摂理」が選んだ者しか入れないという形態を達成する手段として、「摂理」の名称を隠した伝道活動や、教義を外部に公開しないということなどがあると言えます。

そして「カインの性格」はメンバー自身にも向けられます。これら54個は信仰者としての行動規範になります。中でも注目すべきは、「15. 逆らう」「19. 批判する」「23. 不従順」「32. 疑い」「44. 反抗すること・背くこと」「53. 裏切り」「54. 主が油注がれた者に逆らう」とあり、「摂理」や「先生」に対して、疑念を抱くこと、背反した思考や見方や言動をすること、命令や指示に従わないこと、が「カイン」のレッテルと共に悪であるという認識が、教義の中で示されていることがわかります(「先生」自身が「私に逆らうことはよくない。」と教えているわけです。)。このことが、メンバーやバイブルスタディーを学ぶ新入生に、教義に対しても懐疑な姿勢を取ってはいけなさと感じさせ、検証や外部情報の入手を閉ざすことに強く影響するのだと思います。

「先生」をキリストとして受け入れていく仕組み

私たちがサークルの先輩や知人に誘われてバイブルスタディーを学び始めた理由は「自分の人生や世の中をもっと豊かなものにしたい。」と思ったからだと思います。なんとなく勧められて始めた人も「まあ、ためになるのならいいかな。」と感じて受け入れたことでしょう。

バイブルスタディーの入り口は「人生を豊かに生きるにはどうすればいいか？人として成長するにはどうすればいいか？」というところから始まります。

「豊かにする」というのは精神的な意味においてのことです。経済的豊かさを求めるなら宗教に時間を費やしたところで、儲けにはならないでしょう(ヒエラルキーの上層に位置するなら別ですが。)

バイブルスタディーの中で一番初めに訪れるポイントは「霊の存在」についてだと思います。「人には霊・精神・肉体が存在し、相互に影響しあっている。」との教えを受けます。

私たちは自分の精神と肉体の存在を、直接的に認知できるし、肉体と精神の相互関係は私たちが実感しうることです。「病は気から」「健全なる肉体に健全なる精神は宿る」というのは世間一般的な考えでしょう。

しかし、自分の霊の存在について、認知できると言う人は数少ないです。霊能力者と言う人が世の中には居ますが、彼らの真偽について判断できる術を私たちは普通持っていないのが実態です。

私たちはどうやっても、霊について直接的に知りえない。そこがポイントなのだと思います。

霊をはじめ神仏の存在や天国・地獄といった彼の世など、私たちが直接的に知り、確かめ、また実証できない超越的な存在や世界について、信じる者、信じない者さまざまな考え・価値観が世の中には存在します。

こういった超越存在について意識することは、一概に悪いことではありません。計り知れない力を意識することで、自らの高慢を抑え自制し、他に対する感謝や調和が生まれるなど、精神の豊かさに繋がることは、多くの宗教の中で見られることです。

ただ、この超越存在と自分との間に、他の人間の判断が入り込むと様相は変わります。

誰かに「あなたの靈魂は飢え衰えた幼い赤子のようだ」と言われても自ら確かめる術がないのです。

自分で知りえないことをいくら考えてもわかりません。他者からの言葉に頼って判断するしかないわけです。

この他者の言葉を受け入れるならば、これから先のことは相手に委ねるしかなくなります。自分には分からず、相手は分かっているようなのですから。

「霊・精神・肉体が存在し、相互に影響しあっている。」その上、霊が痩せ衰えているのであれば、精神的な豊かさが得られないだろうことは明らかです。「人生を豊かに生きるにはどうすればいいか？」という問いは、「霊を豊かに成長させるにはどうすればいいか？」という問いへと転化します。

そしてその答えは、「霊は神と繋がっているから、この痩せ細り幼い靈魂を豊かにするには、神からの御言葉を聞く必要がある。」というバイブルスタディーの次のポイントに移ります。

「なるほどそれで神の言葉が詰まった聖書を学ぶのか。」と、当初の「聖書を学んでみないか？」という提案へと帰着するわけですが、それに留まらずさらに次のステージへと急ぎ移るのです。

「神からの御言葉を真に伝えられるのは、キリストである。キリストからの御言葉でなければ真の救いには至らない。」

一番初めの問い「人生の豊かさに生きるにはどうすればいいか？」の答えは、「キリストから神の御言葉を聞くこと。」ということになります。

この展開の中で、イエス・キリストへの関心が高まることでしょう。聖書の中で語るイエス・キリストの言葉は「愛・自制・平等・感謝」といった精神的豊かさに繋がる教えなのだと思います。「なるほど旧約聖書はイエスを迎えるものだといえるし、新約聖書にはイエスの教えがつまっている。このことが多くの人がイエスをキリストと慕わせているのだ。」と思えるでしょう。

しかし、ここで大きな変節点を迎えます。

バイブルスタディーは教えます。「イエス・キリストによる救いは不完全である。成約時代に再臨のキリストが現れ、完全なる救いをもたらす。」と。

人生を豊かに生きるには、霊的な救いが不可欠であり、イエス・キリストによる救いではそこに至らないということなのです。

私たちには霊的な世界について自ら確かめて知る力がありません。この他者からの言葉に頼って判断するしかないのです。そして、一番初めに自分の霊魂の存在と様子を、この相手からの言葉によって判断し受け入れたら、今回も受け入れない理由はまず無いでしょう。

「人生を豊かに生きるにはどうすればいいか？」の答えは、「再臨のキリストに出会い、その人から神の御言葉を聞くこと。」になるのです。そして新たな問い「再臨のキリストは誰か？ どうやって出会えばいいか？」がおのずと導かれます。

バイブルスタディーの結論は何かというと、

「再臨のキリストは、このバイブルスタディーを最初に教え伝えた「先生」と呼ばれる方だ」ということです。

バイブルスタディーの核心的講義「ひと時とふた時と半時」の中で、彼が神からキリストとしての使命を授かる啓示を受けたことを教えています。

「人生を豊かに生きるにはどうすればいいか？」という問いは、「再臨のキリストとして「先生」と呼ばれる人間を師事すること。」という結論に至ります。

そしてその後、その団体が「摂理」であること、その「先生」の名が鄭明析ということを知るようになります。気がつけば、人生を豊かに生きるためには、「摂理」に居て、教祖である鄭明析氏を再臨のキリストとして師事しなければならなくなったのです。

「霊・精神・肉体が存在し、相互に影響しあっている。」

「霊魂を豊かにするには、神からの御言葉を聞く必要がある。」

「神からの御言葉を真に伝えられるのは、キリストである。キリストからの御言葉でなければ真の救いには至らない。」

「イエス・キリストによる救いは不完全である。成約時代に再臨のキリストが現れ、完全なる救いをもたらす。」

「再臨のキリストは、このバイブルスタディーを最初に教え伝えた「先生」と呼ばれる方だ」

という内容は全て「先生」が教えたことであり、彼の言葉です。

「神からの真の御言葉を受けていない者の靈魂は飢え衰え幼い」と言うのも「先生」が教えたことですから、当初の「あなたの靈魂は飢え衰えた幼い赤子のようだ」というのも「先生」の考えであって、あなたに直接伝えたその人が靈を見て判断しているわけではないのです。その人もまたそう言われたことを受け入れたから、あなたにそう言っているにすぎないのです。

私たちは「人生を豊かに生きるには？」という人として当然の疑問と要求から始まり、「靈や神の存在」という自分では知りえないことをある一人の人間の言葉に頼って判断することで、「その彼を絶対的に師事する」という結論に辿りついたのです。

これは、「靈や神の存在」についての話以降、自らの人生を一人の人間に委ねたことになります。彼は、師事する人たちの人生を搾取することも利用することも、操作することも可能になのです。私たちも彼と同じ立場になれば、同様の権力が手に入ります。その力をどうするかは手にした人次第ということになります。

その彼自身は超越存在ではなく、私たちと同じ人間です。

また、彼が本当に超越世界について理解しているか、私たちが直接確かめる術はありません。そして、彼が率いる「摂理」に居る人以外は、彼の靈能力や彼を再臨のキリストだと認めている人はいないし、証拠となる物もありません。聖書でさえも彼がキリストだとは書いてないのです。

報道が伝えている情報は、彼が信者たちから搾取しているというものです。

報道の内容が事実なら、人生を豊かにする目的で始めたことが、人生の豊かさを奪われるという結果となる本末転倒な恐ろしく悲しい状況です。

自分がなぜ「摂理」と「先生」を信じるに至ったのか、真摯に顧みることが大切だと思います。

「先生」がキリストではないことの意味

「摂理」の教祖、「先生」と呼ばれる鄭明析氏がキリストでないとするれば、それが何を意味するのか、考えてみたいと思います。

彼は自身を再臨のキリストだとしてひとつ団体を組織しているからには、何かしらの目的があるはずで、そうであれば、彼は何かをきっかけとして妄想するように自身をキリストだと思い込んでしまった、ということになります。どちらにしても、自身がキリストであることを正当化するためにバイブルスタディーを構成していったということになります。そして確かにバイブルスタディーの30講は、彼がキリストであるということへ向かって、段階的に理解が進むように構成されています。

ある一人の人間が、神のごときキリストを名乗ることで、手に入れることができます。

彼は「摂理」を立ち上げる前に、自らをキリストだとする人に出会っています。統一協会の文鮮明氏です。そこにいた期間で、自称キリスト者がどのように振る舞い、何を手にしているのかを、意識無意識を問わず知ることになったはずで、

超越存在である神の意を伝えるキリストを現生する人間が名乗ることは、「現人神」となることと同意と言えます。信仰者にとって、その人が語る言葉は全て真理となり、その人の行動は全て神の意が反映されることとなります。裏返せば、真理や神の意を振りかざせば、信仰者を思うとおりに動かし、そのすべてを掌握することができますようになります。手に入れられるものとは、超越存在としての最高の権力です。それは国家や社会がもつ権力を無効にするほどのものです。ただその権力が及ぶのは、その人をキリストだと信仰する人たちだけに限りませんが、

その権力は行使する意志に問わず手に入るものです。その絶大な力をいかに行使するかどうかは、キリストを名乗るその人自身の道徳に委ねられます。

さてそこで、「先生」がどういう思考経緯と目的をもってキリストを名乗り「摂理」を組織したのか、それが重要であるわけですが、私たちが他者である以上は彼の意中を真に知ることはできません。

また自身をキリストとし、それを実現させるように努めるという精神感覚は、一般の人にとって理解しがたい特殊なものかもしれません。

彼が、何かをきっかけに妄想的に自身をキリストだと思い込んでしまったとしても、強大な意図をもって自身をキリストに仕立てたとしても、信仰者の全てを掌握する絶大な力に気付き、それと自身との欲望とが結びついたとしたら、とても危険なことです。(そして真にキリストであれば、絶大な力と自身の利益とを結びつけないでしょう。)

その時から彼は、信仰者たちの純粋さや情熱までも利用しながらキリストを演じ、組織団体を維持しながら多くを搾取していくでしょう。物理的・経済的な掌握だけでなく、キリストとしての羨望や優遇もまた彼の強い欲求となるでしょう。それは、表で信者に見せるキリストとしての神々しい言動と、裏では社会で犯罪とされることもためらわない私欲に溢れた言動とを、両立させうる精神状態だと言えると思います。そして自分で自分を絶対化させる精神は、自身が信者に説く教義に反する言動でも、自己においては特別化させて正当化させるものかもしれません。

その観点から見ると、「先生」が一般の信者には「性的墮落論」を教えながら、自分が目をかける一部の特別な信者には「健康診断」などとして呼びつけ、「天の特別な愛の対象に選ばれたのだ」などと強制的に性関係をもつという、セックス・スキャンダルとして伝えられていることは可能性として十分に認められると思います。

「先生が人間である以上はその可能性がある。」ということです。

「摂理」で教えるキリストは、神の「使命者」「代弁者」であって、人間です。正統キリスト教とは「三位一体」論が異なります。正統キリスト教では「父なる神、子キリスト、聖霊」は同一存在という認識です。様態が異なるにすぎず、キリストは、聖母マリアからの処女生誕による人の形を取ってこられた神です。

「摂理」の「先生」には遺伝上の両親がいます。神とキリストと聖霊は同じ考えを持つ、つまりチームとしての「三位一体」論です。この違いは「摂理」がキリスト教ではない、異端指定を受ける、理由のひとつです。

ともあれ、神・超越存在ではなく人間である以上は、不完全であり、知らないこともあるのです。そして過つこともあるのです。「サタンに完全勝利した者がキリストである。」という考えを「摂理」では持ちますが、これは人間にとって非常に高いハードルです。煩惱に負けた時点でキリスト失格ということになります。逆を言えば、「キリストで無ければ理性が欲望に負けることもある。」ということです。

そして、「先生も人間だからね。」という言葉で大方のことは大目に見られているのが、「摂理」の現状だと感じます。厳格に精査すると、信者から見て彼がキリストには思えてこないからです。セックス・スキャンダルが事実なら、「彼も人間だから」では済まないことは明らかですが。

教祖「先生」がキリストではないということは、彼も私たちと同じ人間であるということです。

彼は間違ふこともあるし、罪を犯す可能性があることを意味します。

そして、彼の言葉だけを信じることは意味がなくなります。私たちと同じようにひとりの人間としてのみ、その発言に重さがあります。

そして彼は、「自分がキリストであり、スキャンダルのことは、迫害のためのでっち上げの嘘だ。」という実態とは矛盾を起す証言をしていることになります。彼がキリストでなければ、外部が迫害する理由がないからです。

もし仮に、「摂理」が言っているように、「キリストである「先生」からの愛を感じるができなくなり、「摂理」を離れた女性たちが恨みや嫉妬として、このようなスキャンダルのでっち上げをしている」のだとしたら、性的被害を訴えていらっしやる女性たちは、彼をキリストだといまだ信じているということになります。キリストの関心を引くために、御言葉も聞かず「摂理」の外から必死にアピールしていることになります。それはなんの解決にもならないし、狂気の沙汰ではないでしょうか。

また、本当に狂気の中にいるなら、このサタンに奪われたような信者たちを、キリストである「先生」が救ってあげればよいのですが、彼には、そのつもりは無いのか、またはその手立てと能力がないことになります。

キリストからの愛とは神的な博愛を指すと普通考えるわけですが、彼女たちの行動は恋愛的な心理による嫉妬と同様のものということでしょう。つまり愛の意味を履き違えていることになります。彼女たちは「先生」に対して恋心を抱いているということでしょうか。「摂理」の教義によればキリストは恋愛対象ではないはずで、「新婦の思いでキリストを迎える」とは、「先生」を恋愛視するというではないでしょう。キリストからの愛とは何かを、彼女たちに諭して説明してあげれば「先生」への迫害の全ては解決するのです(直接の話し合いをもつことを彼女たちは厭わないでしょう。。「摂理」が言う迫害の理由が正しければ、)。

少し別の見方をすると、被害を訴えていらっしゃる女性たちが「あなたはキリストに真の愛を受ける主の恋人として選ばれた。」と幹部女性から諭されたと言っていることは、「先生からの愛について嫉妬して迫害されている」という「摂理」の釈明と、なぜか不思議と視点が共通しています。どちらも「先生の愛とは恋愛的な愛である。」と考えているようなニュアンスがあり、どちらも「摂理」上層部の考えであるのです。キリストの愛が神的な博愛という認識の中であれば、嫉妬という観念は浮かびにくいものです。そもそも「先生からの愛について嫉妬して迫害されている」と考えるのは何を根拠にしているのでしょうか。根拠が明らかではない釈明は言い訳にすぎません。「摂理」の上層部は本当に迫害の理由を認識できているのでしょうか。純潔なはずの「摂理」の上層部からこういった恋愛的な認識が出てくることは不可思議に思えます。末端メンバーからは伺い知れない「摂理」の上層中心部では何が起っているのでしょうか。

話を本流に戻しますと、キリストを信じておきながら、キリストの不利益になることを行なう必要はありません。迫害とは反対する勢力だからこそできるのです。「摂理」の主張はつじつまが合わないこととなります。

また、彼をキリストだとは思わないのに、わざわざ自分も強く傷つくような嘘を世間にでっち上げる必要はありません。被害もなく、彼をキリストだとも思わないなら、「摂理」など早々に忘れてしまえばよいことでしょう。ただ恨みから来るものであれば、もっと上手に「摂理」を追い詰める方法はたくさんあるでしょう。

どちらにしても、スキャンダルに関して、彼女たちが嘘をでっち上げることで利益を得ることは無いのです。

彼女たちが、「先生」をキリストだと信じていなければ、彼女たちの訴えは信じるに充分値します。

自らを犠牲にしてでも、これ以上被害が広がらないように社会に訴える。というのは、理屈と正義が通っていると思います。

彼女たちの訴えに対して「自分がキリストであり、スキャンダルのことは、迫害のためのでっち上げの嘘だ。」としか釈明できないのが、今の「先生」です。スキャンダルが嘘だと言い切るには、彼がキリストであると考えなければ無理です。彼がキリストでないならば、彼は事実ではないことを語る可能性が大きい人物である、ということになります。キリストではないのにキリストだと言うのですから。

「先生」のセックス・スキャンダルは、真犯人は別にいるという冤罪がない事件です。キリストである「摂理」の教祖という立場は彼しかいません。訴えている内容が事実かどうかです。

被害が立証されれば明らかですが、当事者と「摂理」の中で特別なポジションにいる人たちにしか、直接に真偽を知ることができないのが現状です。

「先生」が真にキリストであればそのような罪を犯すことは決して無いでしょう。

「先生」がキリストでないのなら、被害を受けたという女性たちの訴えは信じるに充分値するでしょう。メンバーたちは一刻もはやく彼への師事は捨てるのが良いでしょう。「摂理」に居る意味はありません。

そして、彼は聖書に基づいて、「自分がキリストである」と主張していますが、聖書に基づけば彼がキリストとはならないことは明らかです。

「摂理」にしかないものはあるのか

もし「摂理」にしかないものがあれば、それを求めて「摂理」に居る価値があるかもしれません。そういったものはあるのでしょうか？

「摂理」で信仰をもっていらっしゃる方の多くは、「自分たちはまず神に立っている」とお思いのことでしょう。神が居ると考えるのは「摂理」だけではありません。「摂理」の外であっても、その人が神の存在を意識すれば、「摂理」の中と何も変わりません。「摂理」に入る以前は神を信じずその働きを感じなかったが、「摂理」で神を信じる中でその働きを感じたということであれば、「摂理」の外で神を信じてもその働きを感じることができるはずで、キリスト教の方たちも聖書に記された神を信じているし、その他の宗教でも神仏を信仰しているところはあまたあります。

[「摂理」を離れること = 神を離れること]ではありません。

霊の存在についても同様です。霊の存在を意識した生活を送る宗教や価値観は、たくさんあります。キリスト教の中でも三分説論をとっているところはたくさんあるでしょう。

「摂理」でなくても、神を信仰し、祈り、賛美し、聖書を読み、日々努めるという生活は送ることができます。それらは「摂理」にしかないものではありません。

「摂理」を離れるとは、キリストを名乗るひとりの男のもとを離れることです。神や信仰や聖書や霊や祈りといったものは、「摂理」オリジナルのものではないのです。

では何が「摂理」オリジナルでしょうか。

教義に関していうと、特に無いというのが実態です。三分説論はキリスト教にあります。

性的墮落論は、神秘心霊主義という流れの宗派が「摂理」に先立って考え練り上げてきたものでした。

より考古学や現代科学に適合した聖書理解を試みる考えは自由主義神学としてキリスト教から既に発生したものです。キリスト教における現代の科学的見地からの聖書理解は「摂理」のそれと比にならないくらいのもので、聖書の各文章がどのように編纂されてきたのか、考古学的事実とどう適合するのかということが調査が進んでいるそうです。

それが過度に進むと、キリストは神ではなく指導者としての人間であるというキリスト教の枠からは外へ遠ざかる考えとなります。

一方で聖書の言葉を神のものとし、厳格に信仰する考えもあります。超越的な存在や出来事を信仰において大切にしていると言えるでしょうか。

正統キリスト教は、イエス以後、2000年もの長い時間の中で、広く深く聖書を調べ考え議論してきたのです。近代以降、科学や思想の発達とともにその拡がりは加速しているでしょう。

「摂理」がバイブルスタディーで天動説だの地動説だの語ってキリスト教を卑下したりしていることは、現在の実態と大きく食い違ったことです。また「摂理」では、「魚の口から銀貨が出てくるはずが無い」と教えておきながら、「先生がふーっと息を吹けば、富士山頂の雲が取り払われた！」と証しするのです。

「摂理」は、科学的姿勢にしても福音的姿勢にしても、正統キリスト教が追求している姿勢と比べると中途半端な印象を受けます。

「摂理」の思考は、キリスト教の幅と深さに追いつけていないというのが現状だと思います。それは、「摂理」はひとりの人間「先生」の考えでしかないのに対し、世界はあらゆる立場と価値観から聖書について研究しているのですから。

「摂理」のメンバーが聖書研究の現状を知らないにすぎないことだと言えます。

摂理の価値観が世界にとってどう新しいのでしょうか。つまり「摂理」は何を革新したのか、ということです。

二千年前のイエスの教えは、虐げられていた人たちに救いを与えたものだと思います。奴隷・娼婦・悪人・病人など社会から見捨てられた人たちに手を差し伸べたその行動は、革命的だったと思います。それは当時の社会体制を覆すものだったため、既得権益を持つ人たちからイエス一行は迫害を受けたのだと思います。

「摂理」の教えは、先んじて有能者を救おうとするものです。社会的な弱者を積極的に、または平等に救おうとするものではありません。救い受けるのに制限をつけない正統キリスト教と比べれば、救いの対象者は少なく、実に限定的です。既存体制に対して救いの枠を拡大させるものではありません。

「摂理」の教えは、社会体制を新たに变化させようとするものでもありません。「摂理」が謳う「千年王国」は、皆の個性が活かされた世界ということですが、それは今の世の中で多くの人々が既に共有している価値観です。社会は「摂理」を迫害する必要がありません。

それでも「摂理」が迫害されていると考えるのは、教祖のセックス・スキャンダルと組織のカルト性による理由です。社会から見た「摂理」の教義への関心は実に薄いのです。教祖「先生」が社会に対して誠実に対応すれば、迫害を受けていると感じる問題はおのずと解決されるのです。

イエスの時代と比較して、自分たちや「先生」が迫害されていると考えるのは、大きな勘違いです。迫害を訴えるのであれば、少なくとも自分たちの存在と活動や教義を社会的に公開してからにすべきでしょう。

「摂理」には再臨のキリストと呼ばれる人がいます。しかし、それさえも、「摂理」にしかないものではありません。統一協会の文鮮明氏をはじめ、自分がキリストだという人は、これまでたくさんいましたし、今もたくさんいるでしょう。キリストと呼ばなくても、自称救世主はたくさんいます。どの人も「自分が本物で他は偽者だ」と言い張っています。選べば“救世主”は「先生」以外にも出会えます。

自称救世主がいなくても絶対唯一の真理を謳う団体は多くあります。これまた選べば、“絶対唯一の真理”を他にも学べるのです。

本当に今を生きる再臨のキリストに出会いたいと心底思っているのであれば、他の自称メシヤたちに会いに行くべきです。ただひとつしか知らずに、「こここそ本物だ」と考えるのは、愚かなことだと感じます。ただ、全ての自称メシヤたちに会い、その教義の全てを知るには、人生の全てを費やしてもきりのない行為のように思います。その前に学ぶべきことがあるはずで。

「摂理」を選ぶとは、「再臨のキリストとして鄭明析氏を選び師事する。」ということにすぎません。

そして、私たちは彼を選ぶために「摂理」にやって来たのではなく、はじめは気軽にサークルに来たに過ぎなかったし、聖書を学ぶにすぎなかったはずが、気がつけば「摂理」と教祖である鄭明析氏を選ばされていたのです。「摂理」の正体が隠された伝道のためのサークルに再臨のキリストを探しに来た人は一人もいないことは明らかでしょう。

私たちは選ばされた救世主や真理の存在に現状満足しているにすぎなかったように思います。頭の中だけで、「ここしかない！」と考えていたでしょう。

「摂理」に所属するメンバーの多くは、そこにいる仲間たちの素晴らしさに感動や共感して、「摂理」に居ることを選んでいるかもしれませんね。

しかし、そこに居る人たちが素晴らしいと感じるのは「摂理」のオリジナルではありません。彼らはもともと「摂理」の名すら知らない世間に居た人たちです。その中で、素晴らしいと感じる人たちを集めてきたのが「摂理」です。メンバーたちは世間に出て、素晴らしいと感じた人に声をかけることに努めているでしょう。

「摂理」の活動の中で、人間的に磨かれていく部分を見てここは素晴らしいと感じるかもしれません。それは前述のように周りの素晴らしいと感じる人たちの影響に感化された部分と、教義による影響があるでしょう。教義によってメンバーたちが人間的に磨かれるのは「摂理」のオリジナルではありません。親愛・平等・自制・誠実・純粋・正義・感謝・熱心などを大切にすることは、正統キリスト教がその発足以来伝え教えてきたことで、それを「摂理」が引き継いで教えているにすぎません。そしてそれらは他の宗教でも、宗教ではなく良心においても大切にされていることです。

また「摂理」のメンバーの中には、その中で築いてきた人間関係を大切に思い、「摂理」に居続けることを選んで居る方もいらっしゃると思います。

「摂理」はメンバーに「摂理」の中での人間関係を与えているのと同時に、「摂理」の外で築き上げられる人間関係の可能性を阻害していると言えます。努めて世間と接触を持たないと、メンバーは「摂理」を通してでしか築けない関係に次第にシフトしてしまいます。

そして、「摂理」で築き上げているそれぞれの人間関係は破綻しうる可能性をいつも秘めています。あなたが情によって「摂理」に留まることを選んでいても、他のメンバーが「摂理」を離れることを選ぶかもしれません。その場合、これまで仲間だと思っていた存在を、以後は敵として見なければならなくなるかもしれません。「摂理」の中での人間関係とは、伝道と脱会のバランスの中でのことです。伝道者数を脱会者数が上回れば、人間関係は縮小してしまいます。「摂理」の外の人間関係は、努め次第で可能性は無限に広がるはずですが、

この数年で、特にこの数ヶ月で「摂理」を離れた人たち同士の再会は容易になり、活発になっています。Stationの駅員に分かる形で登録しておけば、脱会者同士で連絡を取り合うことが可能ですし、脱会者が集まる会も繰り返し行なわれています。望めば、再び一緒にサークル活動を行なうことさえ可能な現状です。

「摂理」を通して、どうすれば人間関係を円滑にできるのかを学んだのであれば、以前より世間でよりよい人間関係を築いていくことができるでしょう。ただ世の中は実に様々なタイプの人がいるわけですが、

あなたが「摂理」に居る理由は何でしょうか。「再臨のキリスト」でしょうか。「唯一の真理」でしょうか。「新しい世界」でしょうか。「築き上げた人間関係」でしょうか。「素晴らしい活動」でしょうか。

それらには絶対唯一の確証があるのでしょうか。確証に根拠が無いのであれば、確かめたほうがよいでしょう。「摂理」のメンバーが良いと感じているもののほとんどは「摂理」オリジナルではないのです。「摂理」でなければ困るということは、「鄭明析氏がキリストである」ということを求めない限りは無いでしょう。

つまり、「摂理」という団体は「再臨のキリストとして鄭明析氏を選び師事する」ためのところですが、それ以外の目的なら居なければいけないところではありません。犯罪に加担している可能性がありますから、よくよく調べて、居るべきかどうかを考えたほうがよいでしょう。

「先生をキリストとして師事する」ことは彼に判断を委ねるところから始まります。彼に委ねるつもりなく始めたのであれば、確かめ直したほうがよいでしょう。彼に操作され搾取されている可能性があるからです。

今は知らずにさせられていることです。知った上でするかどうかが、自分でよく考えて判断することが大切です。

あなたのこれからの人生の全てがかかっていることだからです。

以上で手記「教祖のメシヤ性への指摘」を終わります。